

長岡市内遺跡発掘調査報告書

— 千代栄町地区 —

2 0 0 2

長岡市教育委員会

序

長岡市は、市内のほぼ中央を南から北に向かって流れる信濃川で大きく東西に隔てられています。信濃川左岸の西側には、発達した河岸段丘上に国指定史跡の馬高・三十稲場遺跡と藤橋遺跡をはじめとした縄文時代の遺跡があり、一方沖積地が広がり後背地に東山丘陵が南北に連なる東側には、県指定史跡の栖古城跡や藤ヶ森墳丘墓などの古代から中世の遺跡が分布しています。

東側では昭和の終わりごろから、ほ場整備事業に伴う遺跡の確認・試掘及び発掘調査が多く行われてきました。中世遺跡の多い栖吉地区では平成4年から平成8年にかけて「文明」と墨書された木札が出土した松葉遺跡やトチの実遺構の中道遺跡を発掘しました。また、見附市との境界付近の山北地区では平成11年度から2ヵ年にわたって弥生時代の墳丘墓のある藤ヶ森遺跡や古墳時代の五斗田遺跡を調査しました。

今回の調査は、県営ほ場整備事業が計画されている千代栄町などの地域を対象に、埋蔵文化財（遺跡）の保護とほ場整備事業との調整を図る資料を得るために行ったものです。千代栄町の東側の沢には昭和30年代初めに発掘調査を行った奈良時代初めの間野窯跡があります。今回の調査でも間野墨跡に近い中野内遺跡で窯跡の痕跡が確認されるなどの成果がありました。しかし、耕作との関係などから調査を見送らざるを得ない箇所もあり、ほ場整備事業計画との調査資料とするには不十分な面があります。このため、長岡市教育委員会としては、事業主体者や地元協議会などと協議を重ねて、本地域での再調査を行い、ほ場整備事業計画地内における埋蔵文化財の保護に努めていきたくと考えています。

最後になりますが、今回の調査に御協力をいただきました新潟県長岡農地事務所や地元協議会をはじめ、関係各位に心からお礼を申し上げます。

平成14年3月

長岡市教育委員会
教育長 笠輪春彦

例 言

- 1 本書は、平成13年度に千代栄町地区を中心とした地域に計画されている県営ほ場整備事業計画地内に所在する遺跡を対象に実施した遺跡確認調査の記録である。
- 2 本調査の経費は、国庫補助金、新潟県支出金の交付を受けて長岡市教育委員会が主体となっており、出土品や記録類も保管している。
- 3 本調査は、駒形敏朗が文化財保護法の担当者として、鳥居見栄が調査員として専従して調査に当たった。
- 4 調査に当たり、多数の方々から御指導・御協力をいただいた。

目 次

- 1 調査…………… 1
(1) 調査に至るまで…………… 1
(2) 調査の経過…………… 1
- 2 環境…………… 2
(1) 地理的環境…………… 2
(2) 歴史的環境…………… 2
- 3 中野内遺跡…………… 3
- 4 杉本遺跡…………… 7
- 5 岩瀬遺跡…………… 9
- 6 猫田遺跡……………10
- 7 八枚田遺跡……………13
- 8 終わりに……………14

1 調査

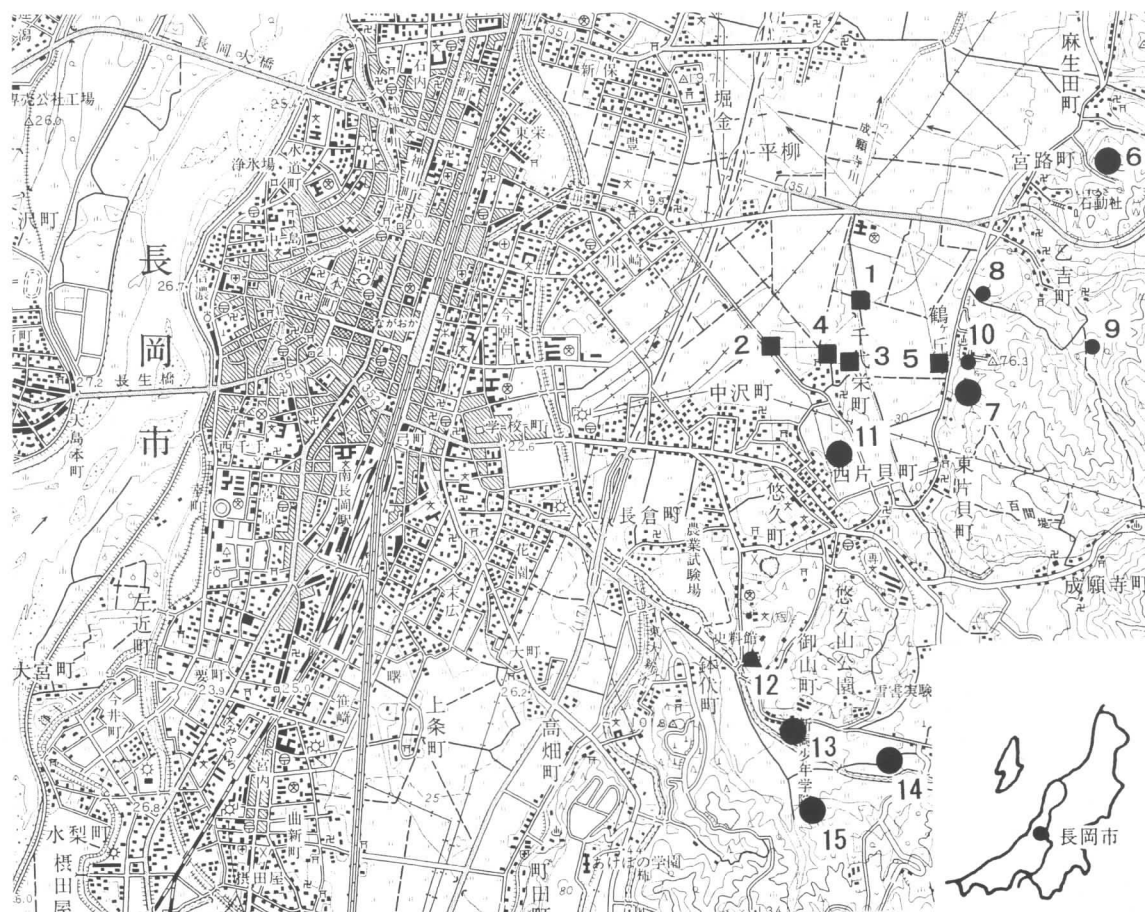
(1) 調査に至るまで

長岡市千代栄町を中心とした地域に県営ほ場整備事業が計画されたのは、平成11年のことである。計画の通報を受けて長岡市教育委員会は直ちに遺跡地図などから周知の遺跡を計画図に落とし込むとともに、現地で分布調査を行った。その結果、計画地には中野内遺跡、八枚田遺跡、杉本遺跡、岩瀬遺跡の4遺跡と、猫田遺跡の東端が計画地内に所在する可能性が高いことなどを確認した。

この結果をもとに、長岡市農林部を通じて事業主体の新潟県長岡農地事務所や地元協議会などと協議を重ね、平成13年度に確認調査を行い、調査の成果に基づいてほ場整備事業計画を立案することになった。

(2) 調査の経過（9月26日～10月18日）

確認調査は地元協議会の協力で、諏訪神社の境内に仮設事務所を設置し、調査機材を搬入することから始まった。調査は、八枚田遺跡から開始し、岩瀬遺跡、杉本遺跡、猫田遺跡、中野内遺跡の順で行った。今回の調査は雨のため、予定していた期間を延長して行った。調査の方法は、水田や荒地などではパワーシャベルを使用し、畑地は人力で発掘した。調査トレンチ（グリッド）は幅2～3m、延長は4mを原則として、土地所有者と耕作者の協力が得られた箇所を設定した。なお、耕作の関係などから試掘調査の協力が得られなかった箇所があり、調査トレンチの設定密度は決して十分とは言えない状況であった。



第1図 調査対象地及び周辺の主な遺跡（1/50,000 長岡）

- 1 八枚田遺跡 2 猫田遺跡 3 杉本遺跡 4 岩瀬遺跡 5 中野内遺跡 6 麻生田古墳群
- 7 七つ塚古墳群 8 岩村窯跡 9 朴ノ木谷窯跡 10 間野窯跡 11 西片貝遺跡 12 堅正寺遺跡
- 13 三貫梨遺跡 14 中道遺跡 15 松葉遺跡

2 環境

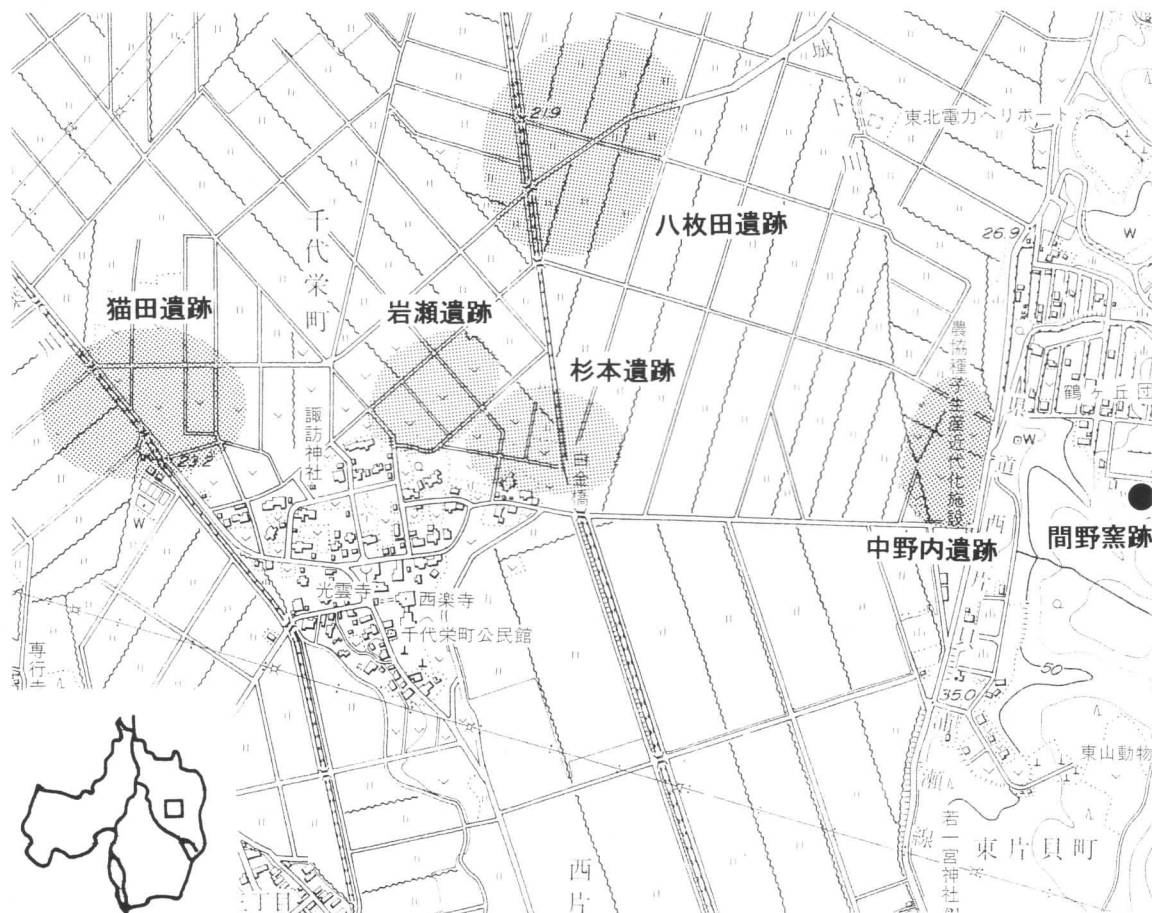
(1) 地理的環境 (第1図・第2図)

県営は場整備事業が計画された長岡市千代栄町は、信濃川右岸の沖積地(新潟平野)の真中に位置する。信濃川右岸は(通称)東山丘陵が沖積地を挟んで信濃川と平行に南北に連なり、千代栄町から北にかけて、かつては渡渉できないほどの湿地帯の八丁沖が広がっている。

今回調査の八枚田遺跡が八丁沖寄りの標高約21mの水田に、猫田遺跡は集落西側縁辺部に位置し、標高約22mの水田と畑、杉本遺跡と岩瀬遺跡は集落北側に広がる水田と畑に隣接して位置し、標高は約23m。中野内遺跡は東山丘陵の裾から西側の傾斜地に位置し、標高約25~30m。地目は畑と荒地。

(2) 歴史的環境 (第1図・第2図)

長岡市の東山丘陵沿いには、弥生時代から古墳時代それに古代・中世の遺跡が多数存在している。北部には環濠集落の横山遺跡や藤ヶ森遺跡などの弥生遺跡が集中し、南の悠久山には堅正寺遺跡がある。古墳時代の集落跡は五斗田遺跡が山北地区にあり、山北地区から南の山本地区には麻生田古墳群と七つ塚古墳群がある。また、山本地区には間野窯跡、岩村窯跡と朴ノ木谷窯跡の須恵器窯跡がある。南の栖吉地区には栖吉城跡を中心に三貫梨遺跡(墳墓・館跡)、中道遺跡、松葉遺跡など中世の遺跡が多数存在している。信濃川右岸の東山丘陵沿いの遺跡は、北部に弥生時代から古墳時代の集落や墳墓が集中し、南部の栖吉に集落跡や墳墓それに城館跡などが存在する傾向が見られる。その中において、北部と南部との中間点に位置する千代栄町付近には、時間的にも両者をつなぐ奈良時代から平安時代の古代遺跡が存在しており、信濃川を遡るかのように水田開発を基礎とした勢力の変遷が見られるようである。



第2図 調査対象地の遺跡群及び間野窯跡 (1/10,000)

3 中野内遺跡 (第3図)

調査 中野内遺跡は、東山丘陵の沢の中に存在する間野窯跡に近く、間野窯跡出土須恵器に類似する須恵器がこれまでに採集されており、須恵器生産に従事していた工人の集落跡の可能性が高いと見られている(「長岡市史 資料編1 考古」長岡市 1992年)。遺物が採集されていた丘陵の裾から沖積地にかけての傾斜面の畑などを対象に、幅2mを原則として延長は発掘が可能な限りの範囲として最長約12mにおよぶトレンチを設けた。パワーシャベルと人力で発掘を進め、調査面積は約175㎡となった。

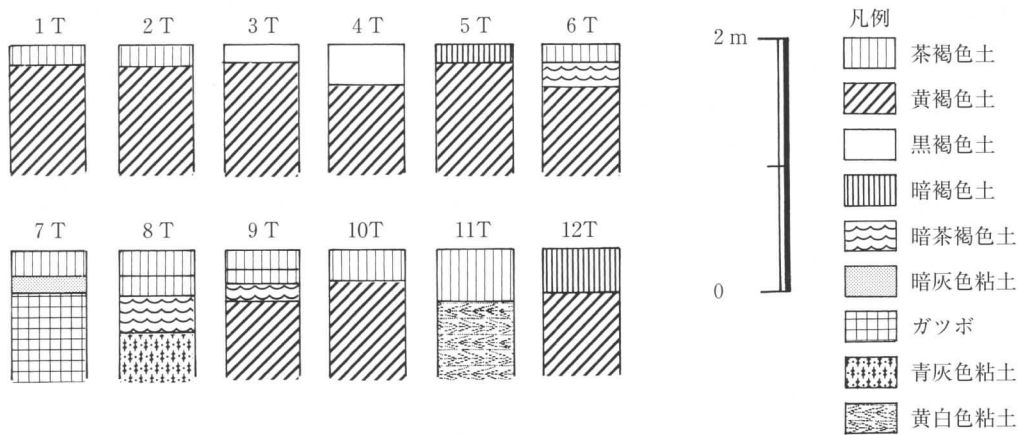
調査地の微地形は、須恵器窯が検出された5 Tを挟んで南北が高く、5 Tから西にかけての斜面が若干窪んでいた。調査で出土した遺物は、須恵器窯跡が検出された5 T以外にはほとんど分布しておらず、須恵器窯の灰原と推定される11 Tで須恵器と土師器が出土しただけにすぎない。それ以外には10 Tで弥生土器が2点出土しただけである。

土層序 (第4図)

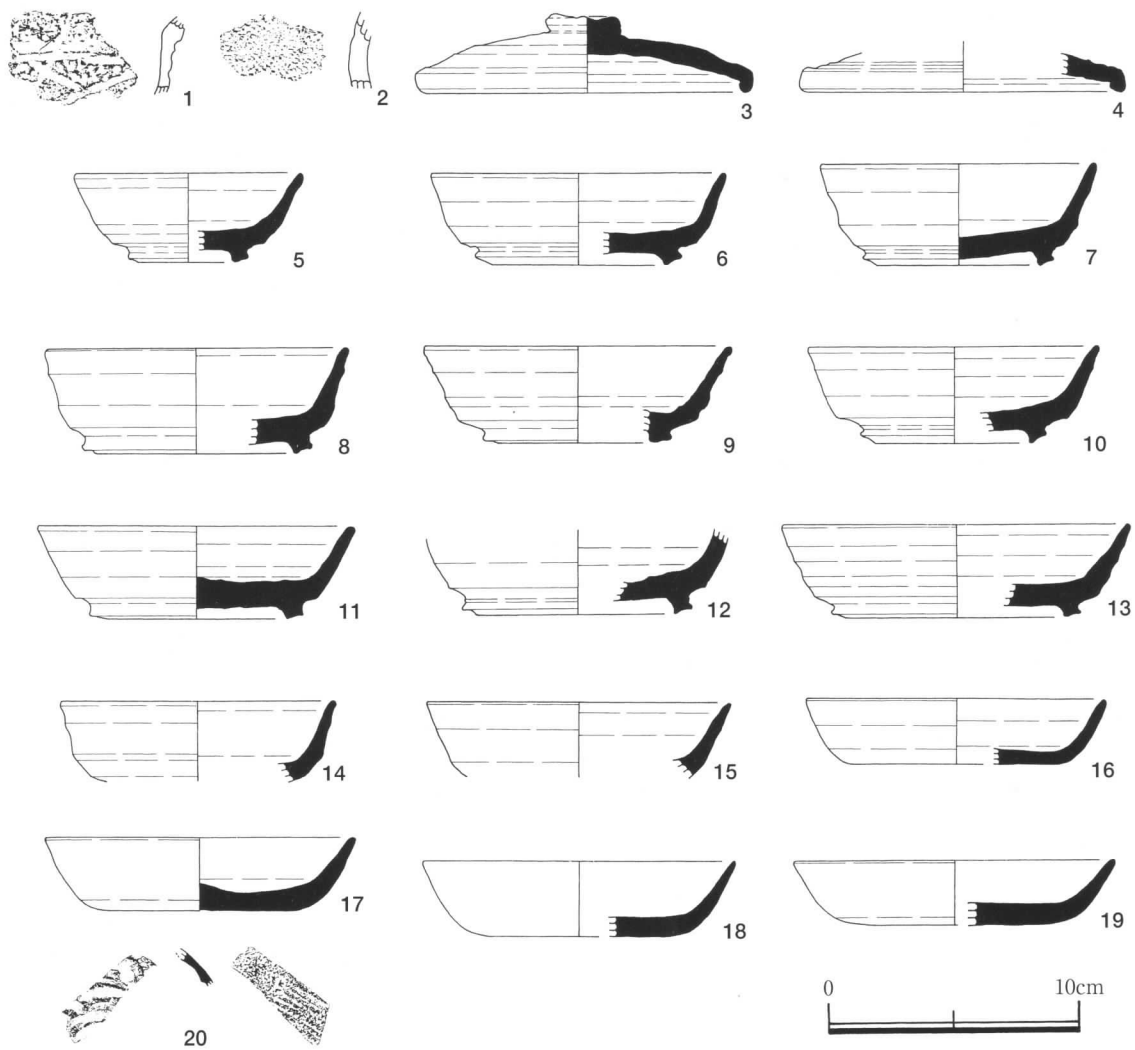
中野内遺跡は東山丘陵から続く斜面のため、斜面の上部—1～3・5 Tは地山までの深度が浅く、15cmほどの表土(耕作土)以下がすぐに黄褐色土の地山となり、傾斜面が低くなるにつれて深くなる。また、浅い沢状に窪んでいる5 T付近は握り拳から人頭大の礫が表土から地山面に見られ、3・4 Tでは小砂利が入っていた。黒褐色土など遺物包含層と見られる土層の堆積は確認されなかった。



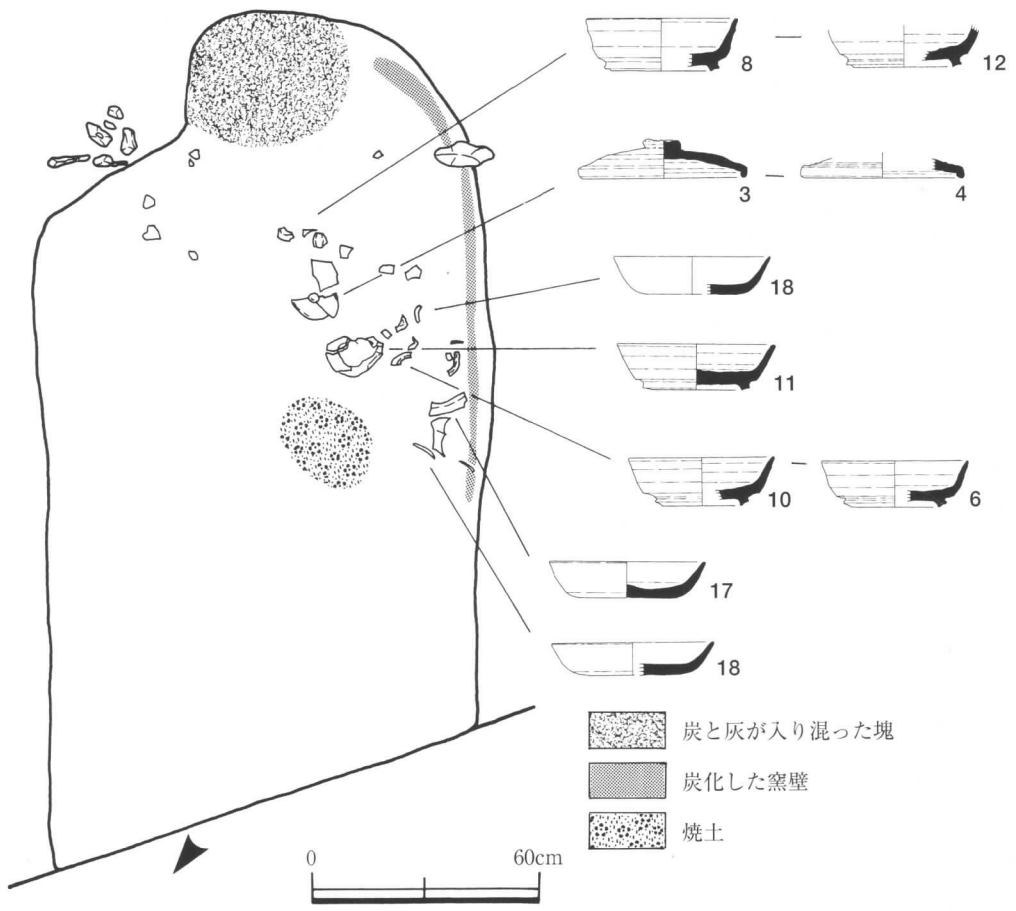
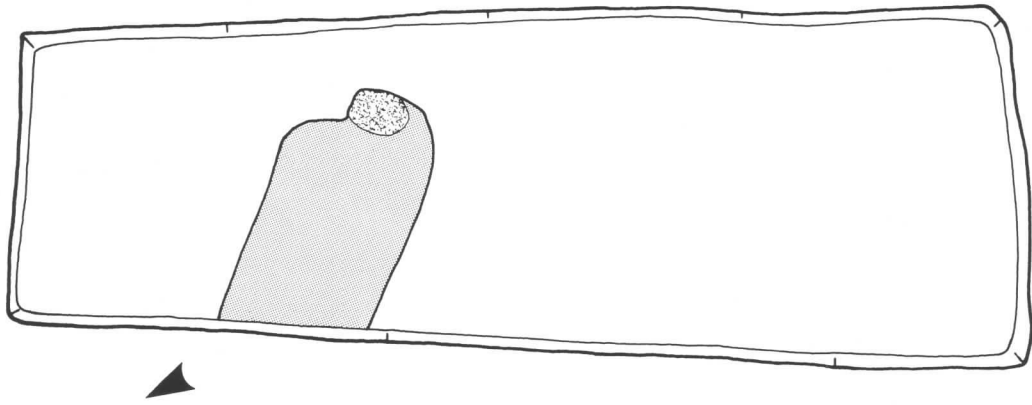
第3図 中野内遺跡調査グリッド図 (1/2,500)



第4図 中野内遺跡土層柱状図 (1/60)



第5図 中野内遺跡出土土器 (1/3)



第6図 中野内遺跡遺構実測図（上：窯跡検出位置図 = 1/60、下：窯跡実測図 = 1/120）

遺構（第6図） 中野内遺跡で確認された遺構は5 Tで窯体の一部と、1 Tで性格不明な穴だけである。窯跡は奥壁から焼成部の中央部と思われる部分である。焚き口や燃焼室、それに灰原などを確認するため、5 Tの斜面下に11・12 Tを設定して発掘したが、窯に伴う施設は検出されなかった。確認できた窯跡の規模は、焼成部の幅が約1.1m、奥壁から確認できた窯体の長さは約1.4mである。窯壁は全体に暗紫色に焼けていたが、ガチガチでなく、むしろ柔らかい状態であった。窯の奥壁から煙道部近くに炭と灰が入り混じった塊があり、崩落した窯壁と考えられる。遺物は奥壁に近いところを中心に須恵器が集中していた。

遺物（第5図） 遺物は前述のように窯体の奥壁部分に集中しているほかは、窯体の近くで須恵器の小破片と10 Tで弥生土器が2点出土しただけである。1・2は頸部付近の破片で、1は列点文の上に沈線で鋸歯状文を施しており、弥生後期の東北系の天王山式土器と思われる。

窯体内からは、杯蓋12点（細かい破片を含む。以下同じ）、有台杯81点、無台杯20点、甕1点の4種類114点の須恵器が出土した。3は全体器形がわかる杯蓋で、やや平らな天井からは丸みを帯びながら、ほぼ垂直に折り曲げられた端部につながる。端部の断面は丸い。つまみは宝珠の頂点が押し込まれた扁平な形である。有台杯（5～14）は底部が丁寧にヘラケズリされ、底部と体部の境界に明瞭な稜線が見られ、幅広で高さの低い高台が外方にふんばり、低い体部がやや外に開くように直線的に立ち上げるものが一般的である。窯体内出土であるが、焼きのしっかりしたものが全体のほぼ3分の2以上を占めている。無台杯（15～19）は有台杯に比べると、一回り大きいこと、底部の切り離しはヘラ切りであるが、有台杯のように底部のヘラケズリは明瞭でなく、底部から体部へは緩やかに立ち上がっている。無台杯の焼きは、有台杯に比べて甘く、蕩けるようなものが大半である。甕（20）は、外面に平行タタキ目、内面に同心円の当て具痕跡の小さい破片が1点だけである。なお、窯跡出土の須恵器は形状から、8世紀後半から9世紀初めごろと考えられる。

表1 中野内遺跡調査概要表

No.	規模	深度	地山土	遺構	遺物	特記事項
1	2×23	10	黄褐色土	ピット4基(?)	なし	特になし
2	2×11	12～20	黄褐色土	なし	なし	特になし
3	2×4	15	黄褐色土	なし	なし	特になし
4	2×4	30～35	黄褐色土	なし	なし	特になし
5	3×8	15	黄褐色土	須恵器窯跡1基	須恵器	地山に礫あり
6	2×6	35	黄褐色土	なし	なし	特になし
7	2×3	33	ガツボ	なし	なし	特になし
8	2×3	70	青灰色粘土	なし	なし	特になし
9	3×3	40	黄褐色土	なし	なし	特になし
10	2×3	25	黄褐色土	なし	弥生土器	特になし
11	1.5×12.5	100～	不明	なし	須恵器	窯の焚き口や灰原などの施設を確認するために設定。
12	1.5×6	35	黄褐色土	なし	なし	

※1 規模…トレンチの大きさで、単位はm。

※2 深度…表土面から地山土までの深さで、単位はcm。

※3 ガツボ…水辺に自生するヨシなどの植物が腐蝕して堆積したもので、暗褐色を呈する。

米印は、以下の各遺跡調査概要表に共通する。

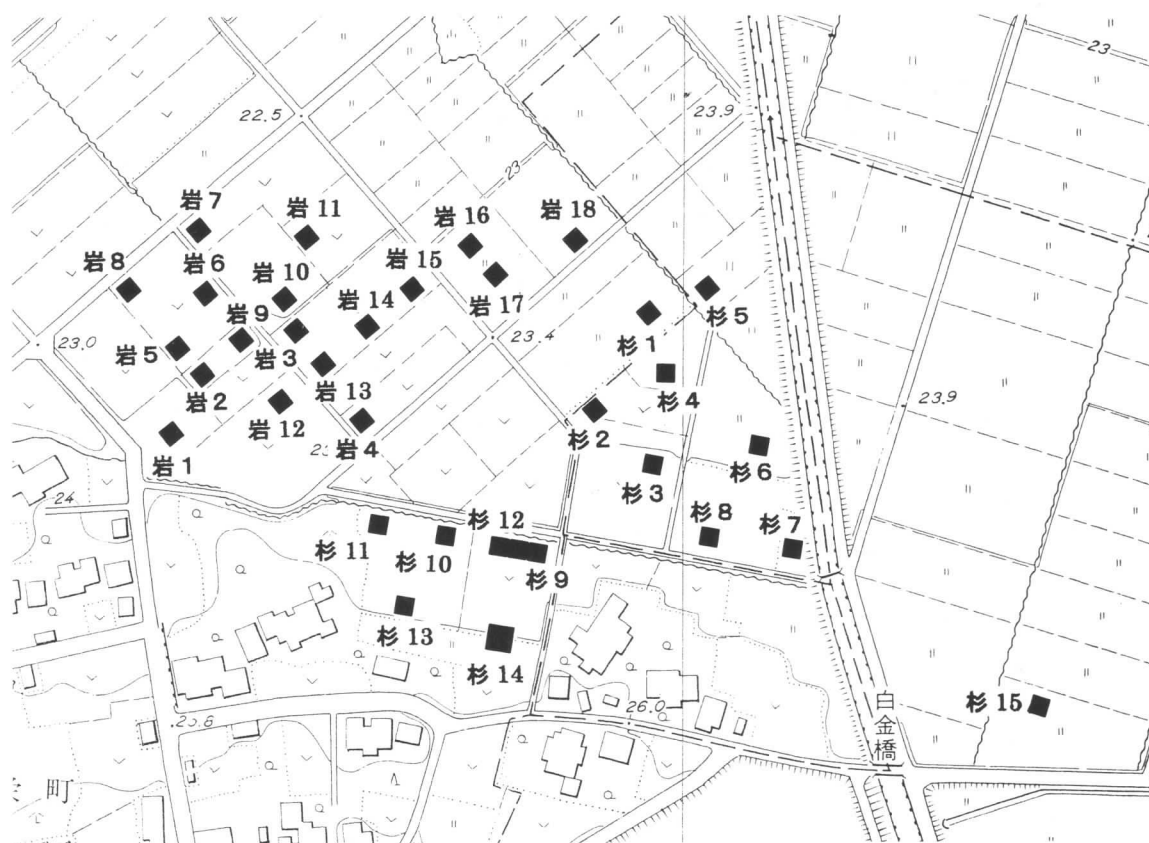
まとめ 中野内遺跡は間野窯跡に近く、須恵器などが採集されているところから間野窯に従事した工人関係の集落の可能性が指摘されていた遺跡であるが、今回の調査で須恵器の窯跡そのものが確認されたことから、遺跡の種別は須恵器を生産した窯跡に変更される。

窯の焚き口や灰原などを確認するために設けた11・12Tではこれらの遺構—特に灰原が確認されなかったこと、窯壁がガチガチでないこと、土器の出土位置が窯体内にほぼ限られていることなどから、中野内窯は最初の操業途中で窯が崩落した可能性が高いと考えられる。

4 杉本遺跡

調査（第7図） 千代栄町集落の北東部を流れる山北用水路に接する杉本遺跡からは、これまでに須恵器や珠洲焼きなどが採集されていた。今回の調査は遺物が採集された地点を中心に、協力が得られた田畑に試掘用のトレンチを合計15本設置して、パワーシャベルと人力で発掘を行った。なお、12Tは9Tでピットらしい落ち込みが検出されたので西側に拡張したトレンチである。調査面積は約211㎡

土層序（第8図） 杉本遺跡の発掘地域は、集落脇（9～14T）、山北用水路脇（6～8T）、それに1～5Tの3地点である。集落脇の土層序は、10・11T以外は表土直下が地山となるほど浅く、10・11Tも薄い表土の下に薄い遺物包含層の黒褐色土が見られる程度で、全体的に浅い。山北用水路脇の7Tでは黒褐色土が厚く堆積している。また、7Tの地山は湿地の黄灰色粘土であるが、6・8Tは丘陵地に見られる黄褐色土であった。千代栄町集落から北に離れたトレンチには遺物包含層は確認されなかった。

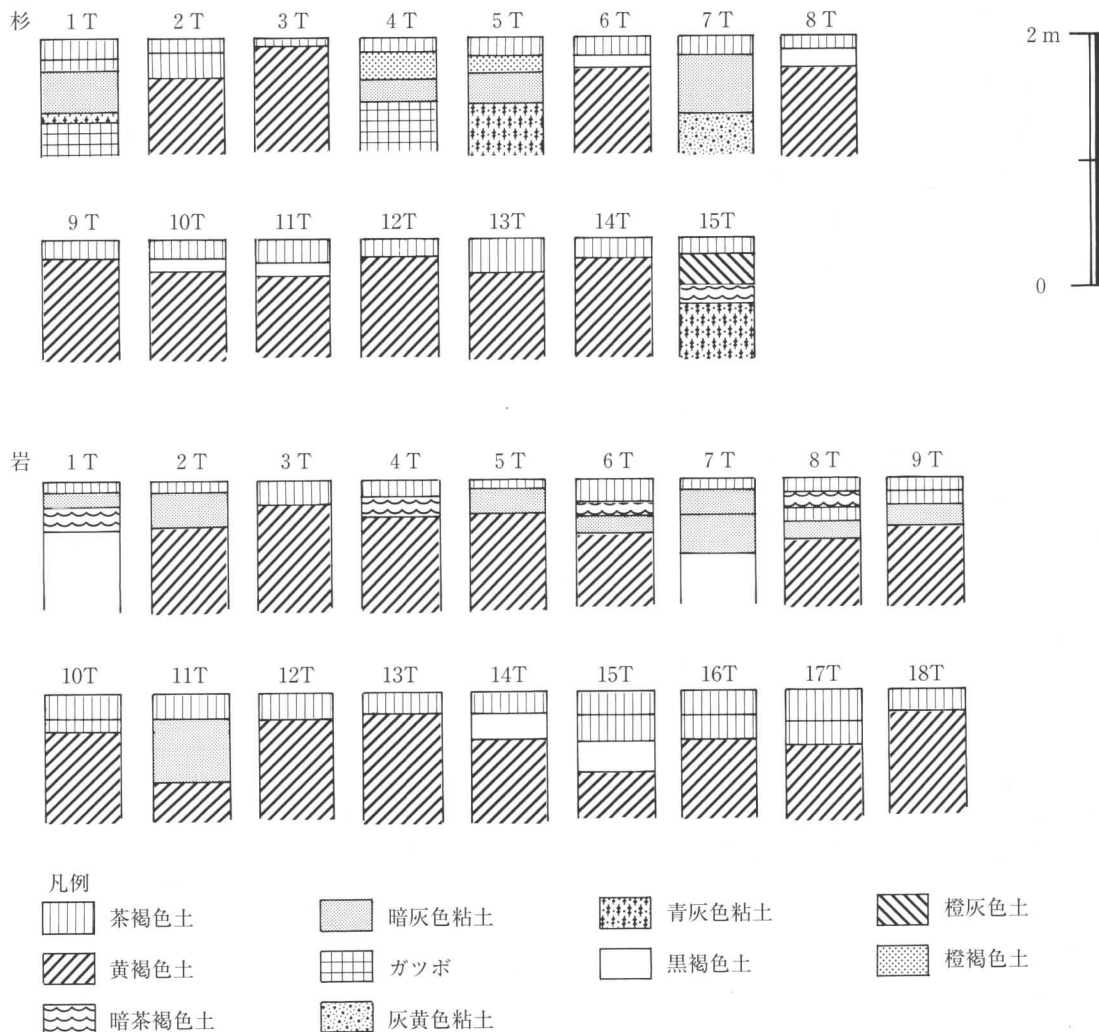


第7図 杉本遺跡・岩瀬遺跡調査グリッド図（1/2500）

遺構 (第9図) 遺構は、中世の土器だけが出土したところで、12・14Tで溝、12・13・14Tでピットを確認。12Tの溝は幅90cm以上、深さ約20cmで、トレンチの東端を南北方向に走っている。断面はやや箱型を呈し、覆土から珠洲焼の鉢と甕の破片が出土した(第9図の溝内のドット)。14Tの溝は幅約20cmで、トレンチを東西方向に蛇行していた。蛇行する溝の南に楕円形の落ち込みが確認された。12・13Tのピットは、中世の柱穴としては規模が小さく、その性格は不明である。

遺物 (第10図21~25) 出土した土器は、古代の土師器と須恵器、それに中世の珠洲焼などである。古代の土師器・須恵器は山北用水路脇、中世の遺物は集落に隣接するトレンチに限られていた。山北用水路脇出土の土師器は、「く」の字に折り曲がる頸部と、ハケ目調整の胴部が見られる長胴甕の破片、須恵器は杯の口縁部破片(21)と外面が格子目タタキ、内面が同心円の当て具痕跡がある甕の破片(22)である。おそらく9世紀ころのものと思われる。珠洲焼は底部が静止糸切り痕の鉢(24)と、外面に平行タタキ目の甕もしくは壺(23・25)の破片である。鉢(24)と甕(25)は12Tの溝出土である。

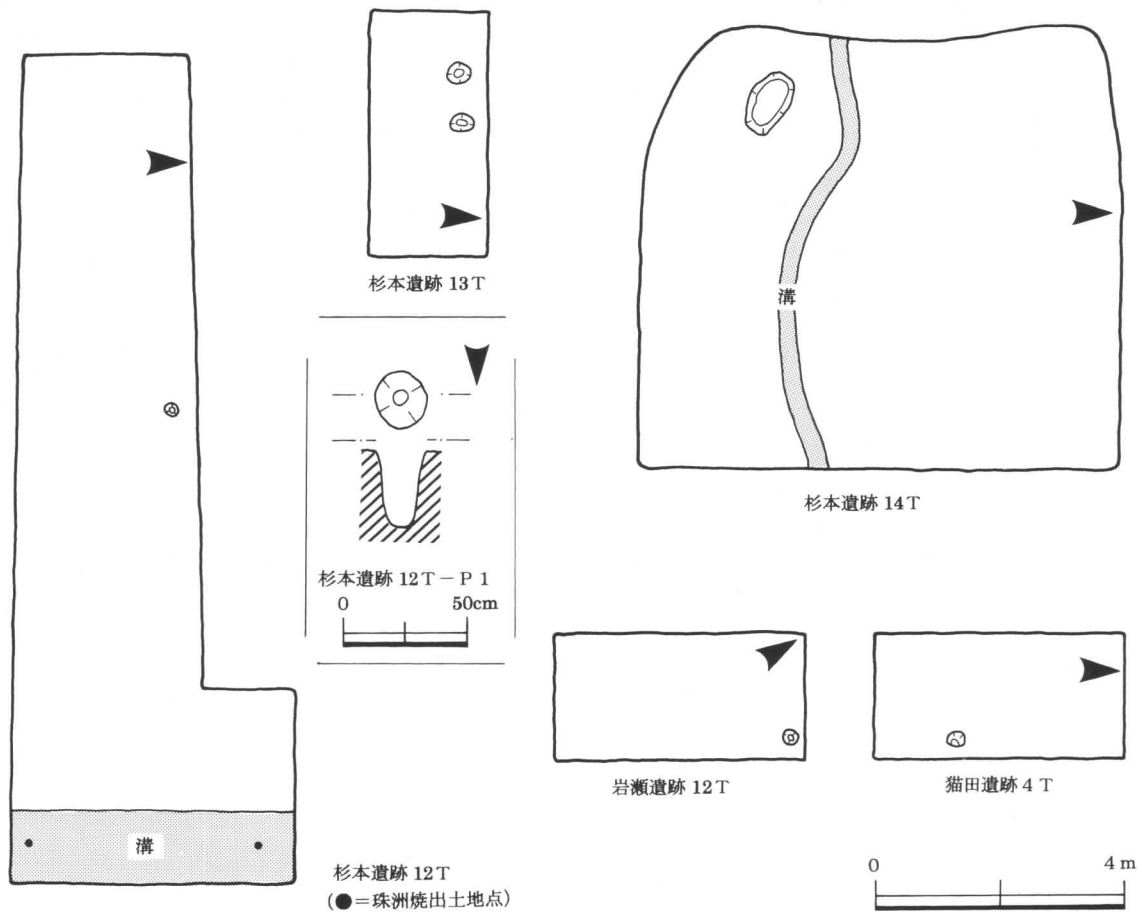
まとめ 杉本遺跡からは古代と中世の土器が出土しているが、前述のとおり古代と中世とでは出土位置が異なっている。そして、岩瀬遺跡に近接していることから同一遺跡とも考えられるが、調査箇所が十分でないこともあり、その結論は次回の調査の成果を待つことにする。



第8図 杉本遺跡・岩瀬遺跡土層柱状図 (1/60)

表2 杉本遺跡調査概要表

No.	規模	深度	地山土	遺構	遺物	特記事項
1	2×4	64	青灰色粘土	なし	なし	特になし
2	3×4	35	黄褐色土	なし	なし	特になし
3	1×2	10	黄褐色土	なし	なし	特になし
4	3×4	51	ガツボ	なし	なし	特になし
5	2×4	55	青灰色粘土	なし	なし	特になし
6	3×5	25	黄褐色土	溝?	須恵器、土師器	特になし
7	2×3	60	灰黄色粘土	なし	土師器	特になし
8	2×4	24	青灰色粘土	なし	なし	特になし
9	2×4	15	黄褐色土	なし	珠洲焼	特になし
10	3×4	25	黄褐色土	なし	なし	特になし
11	3×4	29	黄褐色土	なし	土師器、陶器	特になし
12	3×13	15	黄褐色土	ピット、溝	珠洲焼、陶器	9 Tの西を拡張
13	2×4	30	黄褐色土	ピット	珠洲焼	特になし
14	7.6×7	18	黄褐色土	ピット、溝	なし	特になし
15	2×4	55	青灰色粘土	なし	なし	特になし



第9図 杉本遺跡・岩瀬遺跡・猫田遺跡遺構実測図 (1/120)

5 岩瀬遺跡

調査 (第7図) 岩瀬遺跡は杉本遺跡と隣接しており、事前の分布調査では須恵器や珠洲焼が採集された。調査は、協力を得た田畑に2×4mを原則としたトレンチを18本設定して人力で発掘した。面積は150㎡。

土層序（第8図） 岩瀬遺跡の土層序は、表土・茶褐色土（遺物包含層？）・地山が基本的であるが、基本土層序が見られるのは1・4・6・8Tの4トレンチだけである。他は、堆積が浅いことから表土直下が地山であったり、あるいは畑に転用したかつての水田であることから粘土層が挟まったりしている。

遺構（第9図） 岩瀬遺跡で確認された遺構は、12Tのピット1基だけである。直径25cm、深さ27cmである。遺物が出土しないトレンチであり、かつ規模が小さいことなどからピットの性格は不明である。

表3 岩瀬遺跡調査概要表

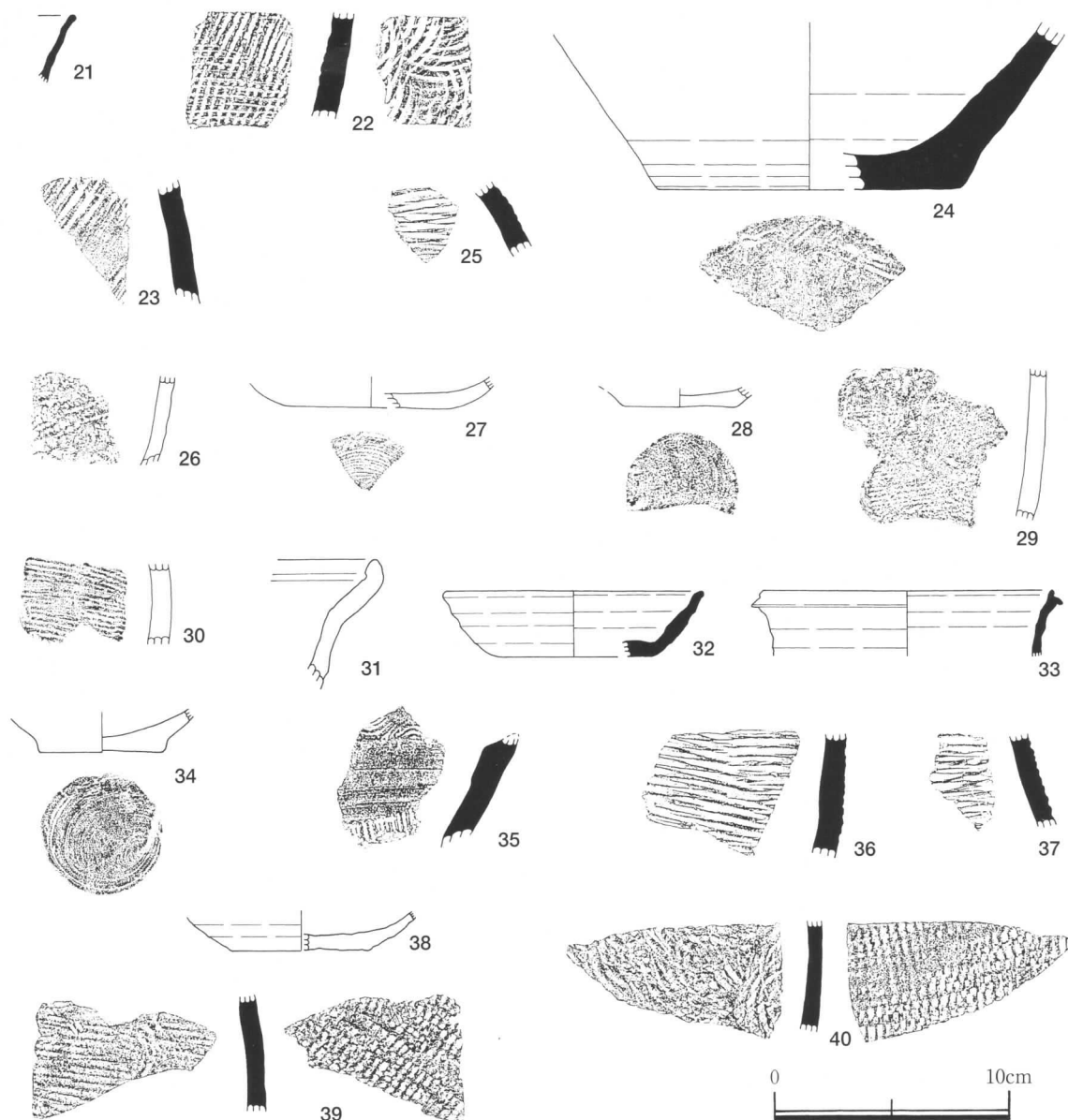
No.	規模	深度	地山土	遺構	遺物	特記事項
1	2×4	—	—	なし	弥生土器	40cmで湧水のため、発掘停止
2	2×4	36	黄褐色土	なし	珠洲焼	特になし
3	2×4	20	黄褐色土	なし	なし	特になし
4	2×4	30	黄褐色土	なし	土師器、須恵器、瓦器の皿	特になし
5	2×4	30	黄褐色土	なし	なし	特になし
6	2×4	44	黄褐色土	なし	なし	特になし
7	2×4	30	ガツボ	なし	なし	
8	2×4	48	黄褐色土	なし	瀬戸美濃	
9	2×4	40	黄褐色土	なし	なし	
10	1.5×4	30	黄褐色土	なし	なし	特になし
11	2×4	70	黄褐色土	なし	土師器	
12	2×4	23	黄褐色土	ピット1	なし	
13	2×4	18	黄褐色土	なし	土師器	
14	2×4	37	黄褐色土	なし	土師器、須恵器	
15	2×4	65	黄褐色土	なし	土師器、須恵器、珠洲焼、瀬戸美濃	特になし
16	2×4			なし	土師器、瀬戸美濃	
17	3×4	45	黄褐色土	なし	土師器、珠洲焼	特になし
18	3×4	16	黄褐色土	なし	なし	特になし

遺物（第10図26～37） 弥生土器、古代の土師器と須恵器、中世の珠洲焼と瓦器などが出土した。弥生土器は集落寄りの1Tで4点出土している。他には広がっていない。縄文が施された弥生後期の土器（26）である。土師器は回転糸切底の杯（27・28）と内面にカキ目調整がある長胴甕の破片（29・30）と鍋と思われる口縁部破片（31）が出土している。須恵器は4Tで長頸壺の口縁部破片（33）が1点と、14・15Tから出土した各1点ずつの無台杯（32）がある。9世紀代の所産と考えられる。中世の珠洲焼は2・15・17Tの3トレンチから各1点ずつの3点出土した。器種は口縁に波状文がある播鉢（35）と、壺と甕の胴部破片（36・37）である。その他に瓦質土器の皿（34）が2点出土している。

まとめ 岩瀬遺跡の確認調査ではピットが2トレンチから3基、遺物が弥生土器、古代の土師器と須恵器、それに中世の珠洲焼などが集落に近いところから杉本遺跡寄りにかけて集中しており、杉本遺跡と同一の遺跡である可能性が想定される。

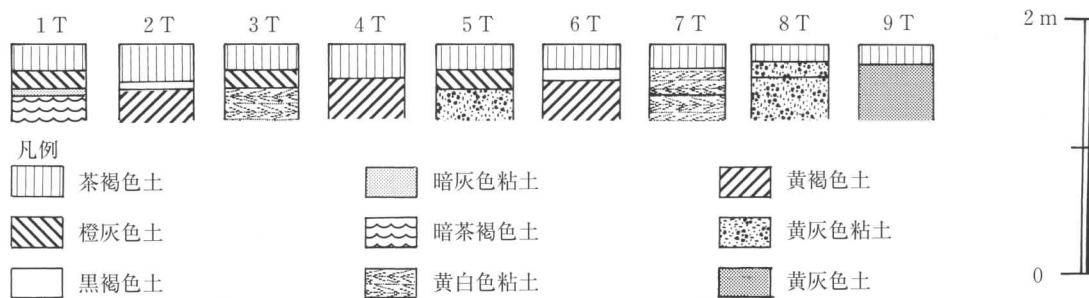
6 猫田遺跡

調査（第12図） 今回の調査は、集落西側の道路から東側で、ほ場整備事業計画地の畑に2～3m幅のトレンチを9ヶ所設けて、人力とパワーシャベルで発掘を行った。遺構・遺物は4Tで確認されたのみで、全体の広がり把握できなかった。なお、調査面積は75㎡である。



第10図 杉本遺跡 (21~25) ・岩瀬遺跡 (26~37) ・猫田遺跡 (38~40) 出土土器 (1/3)

土層序 (第11図) 猫田遺跡の表土から地山までの堆積は薄く、遺物包含層と見られる土層は確認されなかった。遺物が出土した4 Tでもその状況には変わりがないほどである。



第11図 猫田遺跡土層柱状図 (1/60)

遺構（第9図） 猫田遺跡の調査で確認された遺構は、須恵器・土師器が出土した4 Tで小さいピットの2基だけで、P1の覆土から土師器の杯の破片が出土している。ピットは古代の掘立柱建物の柱穴にしては小さく、現状では性格不明と言わざるを得ない。



第12図 猫田遺跡調査グリッド図（1/2500）

遺物（第10図38～40） 猫田遺跡の土師器・須恵器が出土したのは4 Tの包含層とP1のみである。土師器は杯の破片（38）が多く、底部に回転糸切り痕跡が見られる。須恵器は杯蓋の口縁部破片と、外面に格子目状のタタキ痕跡、内面に同心円の当て具痕跡の甕（40）と内外面ともに格子状のタタキ痕跡と当て具痕跡の甕の破片（39）がある。時間は平安時代初期～9世紀初頭と思われる。

まとめ 猫田遺跡は、千代栄町集落の西側を栖吉町から国道17号線に通じる道路を挟んだ西側に遺跡が広がっていると考えられていたが、今回の調査では東側のトレンチの1ヵ所とはいえ、まとめて土師器と須恵器が出土し、かつ1点の土師器破片がピット内から出土した。このことから道路の東側にも遺跡が広がっていると考えられる。しかし、設定した調査トレンチが少ないこともあり、遺跡全体の広がりを把握するには再度試掘調査を実施して確認する必要がある。

表4 猫田遺跡調査概要表

No.	規模	深度	地山土	遺構	遺物	特記事項
1	2×8	40	黄褐色土	なし	なし	地山土の下に灰褐色粘土
2	4×4	35	黄褐色土	なし	なし	特になし
3	2×4	35	橙灰色砂土	なし	なし	特になし
4	2×4	25	黄褐色土	ピット2	須恵器、土師器	特になし
5	2×2	35	黄灰色粘土	なし	なし	特になし
6	3×3	25	黄褐色土	なし	なし	特になし
7	2×3	18	灰黄色粘土	なし	なし	特になし
8	2×4	23	橙灰色砂土	なし	なし	特になし
9	2×4	17	青灰色粘土	なし	なし	特になし



第13図 八枚田遺跡調査グリッド図 (1/2,500)

7 八枚田遺跡

調査 (第13図) 八枚田遺跡は1950年ころに山北用水路の工事現場から平安時代初めの須恵器と土師器などが採集されている。調査は八丁沖に面する水田を対象に、 2×3 mのトレンチを原則として17ヶ所設定してパワーシャベルで発掘を進めた。調査面積は92㎡である。遺構・遺物ともに確認されなかった。

土層序 (第14図) 基本土層序は、表土 (水田耕作土)・橙褐色土・地山である。八枚田の地山は青灰色砂、青灰色粘土、暗灰色粘土、それにガツボをもって地山とした。

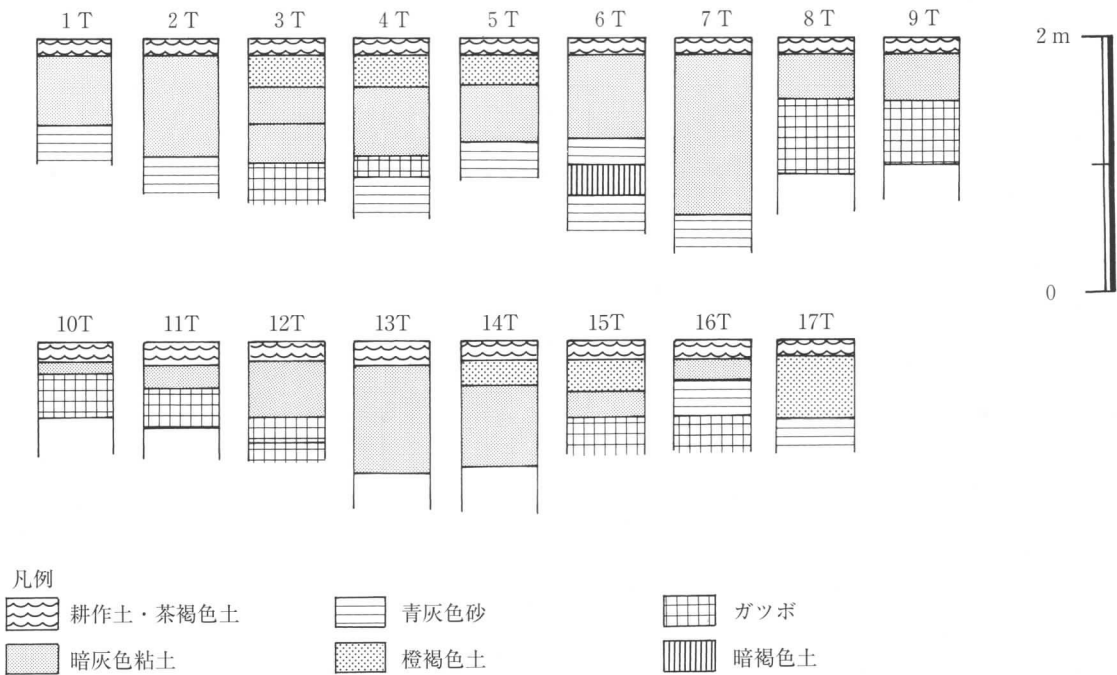
まとめ 八枚田遺跡は、今回の調査で遺構・遺物ともに検出されなかったとはいえ、それだけで八枚田は遺跡ではないと結論付けることはできない。それは、今回の調査が青灰色粘土 (砂) もしくは水辺のガツボを地山と認定したため、山北用水路の掘削深度まで達していない可能性があり、ほ場整備事業の掘削深度が1 m以内を予定していることに合わせて調査を行ったからでもある。

表5 八枚田遺跡調査概要表

No.	規 模	深 度	地 山 土	遺 構	遺 物	特 記 事 項
1	2×3	70	青灰色砂	なし	なし	特になし
2	2×3	95	青灰色砂	なし	なし	特になし
3	2×3	100	ガツボ	なし	なし	特になし
4	2×3	110	青灰色砂	ピット2	なし	特になし
5	2×2	85	青灰色砂	なし	なし	特になし
6	2×2	125	青灰色砂	なし	なし	特になし
7	2×2	140	青灰色粘土	なし	なし	特になし
8	2×2	50	ガツボ	なし	なし	特になし
9	2×3	50	ガツボ		なし	特になし
10	2×3	25	ガツボ		なし	特になし
11	2×2	40	ガツボ		なし	特になし
12	2×2	60	ガツボ		なし	特になし
13	2×2	60	暗灰色粘土		なし	特になし
14	3×5	35	暗灰色粘土		なし	特になし
15	2×2	60	ガツボ	なし	なし	特になし
16	3×3	60	ガツボ	なし	なし	特になし
17	2×4	63	青灰色砂	なし	なし	特になし

8 終わりに

県営ほ場整備事業が計画されている5遺跡を対象に土地所有者などの協力を得ながら実施した。中野内遺跡では8世紀後半から9世紀初めの須恵器生産の窯跡が、杉本遺跡と岩瀬遺跡では平安時代の土師器と須恵器それに中世の珠洲焼などが出土、猫田遺跡では平安時代の土師器と須恵器が出土、それに八枚田遺跡では遺構・遺物がないことなどを確認した。しかし、調査に対する理解が得られずに調査を見送った箇所があった。同一遺跡の可能性が高い杉本と岩瀬、それに猫田は設定トレンチの不足から遺跡全体の様子を探ることができず、理解が得られた段階で再確認する必要がある。



第14図 八枚田遺跡土層柱状図 (1/60)



中野内遺跡近景



中野内遺跡発掘風景（1T）



中野内遺跡 1T完掘状況



中野内遺跡 5T完掘状況（奥に須恵器窯跡）



中野内遺跡須恵器窯跡（西から）



中野内遺跡須恵器窯跡発掘風景



中野内遺跡須恵器窯跡（南から）



中野内遺跡窯体内の須恵器出土状況

写真1 中野内遺跡確認調査



杉本遺跡珠洲焼出土状況（12T溝跡）



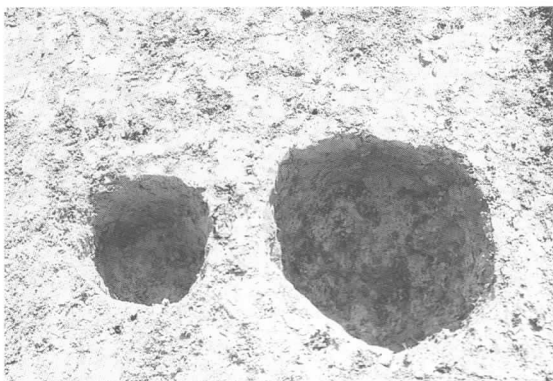
杉本遺跡12Tピット



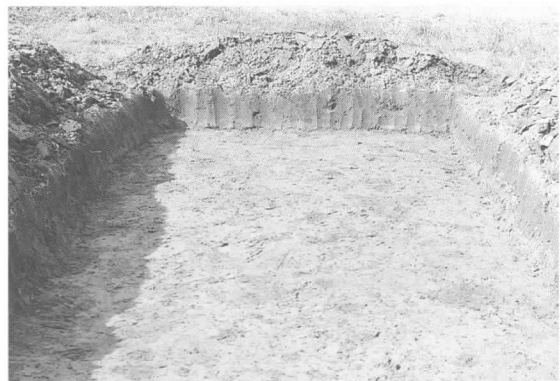
岩瀬遺跡須恵器出土状況（4T）



岩瀬遺跡土師器出土状況（4T）



岩瀬遺跡12Tピット



猫田遺跡4T完掘状況



八枚田遺跡発掘風景



八枚田遺跡13T完掘状況

写真2 杉本遺跡・岩瀬遺跡・猫田遺跡・八枚田遺跡確認調査

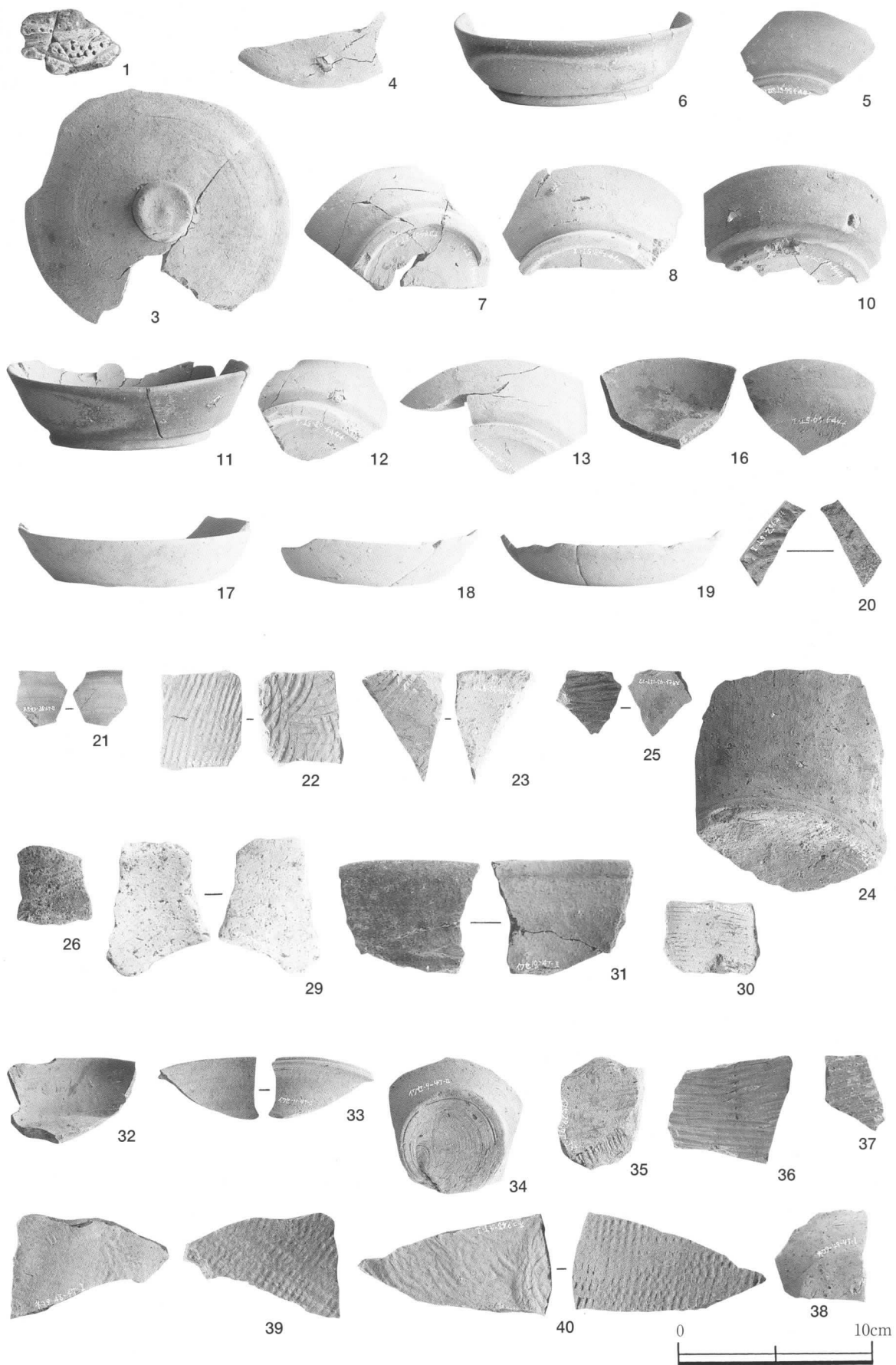


写真3 千代栄町地区確認調査出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかしないいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	長岡市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	千代栄町地区							
巻次数								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	駒形敏朗							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940—0072 新潟県長岡市柳原町2-1 電話番号 0258—32—0546							
発行年月日	2002年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調 査 期 間	調査面積 ㎡	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
なかやちいせき 中野内遺跡	ながおかしひが しかたかい 長岡市東片貝	1 5 2 0 2	8 0	37°26'24"	138°53'06"	2001年 9月26日～ 10月18日	175	県営ほ場 整備事業
すぎもといせき 杉本遺跡	ながおかしちよえい ちようあざすぎもと 長岡市千代栄 町字杉本		3 4 5	37°26'36"	138°53'20"		211	
いわせいせき 岩瀬遺跡	ながおかしちよえい ちようあざいわせ 長岡市千代栄 町字岩瀬		3 4 4	37°26'36"	138°53'18"		150	
ねこたいせき 猫田遺跡	ながおかしなか ざわまち 長岡市中沢町		3 8 4	37°26'36"	138°53'06"		75	
はちまいたいせき 八枚田遺跡	ながおかしひが しかたかい 長岡市東片貝		3 8 3	37°26'47"	138°53'20"		92	
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
中野内遺跡	窯跡	古代	須恵器窯跡		須恵器			
杉本遺跡	遺物包蔵地	古代・中世	溝・ピット		土師器・須恵器・珠洲焼			
岩瀬遺跡	遺物包蔵地	古代・中世	溝・ピット		土師器・須恵器・珠洲焼			
猫田遺跡	遺物包蔵地	古代	ピット		土師器・須恵器			
八枚田遺跡	遺物包蔵地	古代	なし		なし			

長岡市内遺跡発掘調査報告書

—千代栄町地区—

平成14年3月25日発行

発行：長岡市教育委員会

印刷：第一印刷所